



Title	異文化体験からうまれた「上海游記」
Author(s)	Yan, Weichen
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2025, 11, p. 53-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102722
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

異文化体験からうまれた「上海游記」

テクスト環境論 博士後期課程1年

YAN WEICHEN

はじめに

明治時代から数多くの作家、学者など日本人知識人階層が中国に訪れ、またその体験を紀行文として残している。大正時代の代表作家と思われる芥川龍之介もその一人である。一九二一年三月下旬から七月中旬にかけての百二十余日、芥川龍之介は大阪毎日新聞社の視察員として中国東部、中部の都市を遍歴した。帰国後、芥川は「上海游記」（『大阪毎日新聞』及び『東京日日新聞』に連載 一九二一年八月十七日～九月十二日）をはじめとして次々と中国旅の紀行文を発表した。芥川の中国旅行のうち、上陸して初めて滞在したのは上海であった。そのうち三週間ほどはやむを得ず入院していたとはいえ、初上陸したのは上海であり、それから一ヶ月以上留まつて見物をしていたため、上海での生活は芥川の中国体験の原点と言えるだろう。また、同年三月三十一日付の『大阪毎日新聞』に「支那印象記 新人の眼に映じた新しき支那 近日の紙上より掲載の筈」という記事が掲載された。芥川の中国旅の紀行文を予告したもので、「支那は世界の謎として最も興味の深い国である。古き支那が老樹の如く横はつて居る側に、新しき支那は嫩草の如く伸びんとして居る。政治、風俗、思想、有ゆる方面に支那固有の文化が、新世界の夫と相交錯する所に支那の興味はある」と述べるように、当時中国の興味深いところは「支那固有の文化」と「新世界」の文化が「相交錯する所」にあつた。そして、芥川の最初の旅先の上海はまさにそれらが「相交錯する所」にふさわしい都市であった。一八四二年アヘン戦争の終結の結果として、南京条約が結ばれ、上海はその条約によって開港した。その後、イギリス租界（後にアメリカ租界と合併して共同租界となる）やフランス租界などの租界が形成され、日本・支那各の政治や文化などが交わる都市になっていた。故に、この国際都市において、芥川がどういう立場でこの三つの主体の異文化体験をしたのかは興味深い議題となつてくる。

先行研究

ここでは本論と関わる先行論を取り上げて見ていただきたいと思う。

まず西洋に対する芥川の視線についての先行論には、趙夢雲（一九九四年）・施小

一 趙夢雲「近代日本文学における上海..作家の上海体験とその文学」

法政大学提出博士

煥（一九九六年）²のものがあげられる。趙夢雲氏は芥川が「上海における『西洋』」の問題を取り上げ、その場違い、異和感と悪俗ぶりを厳しく批判した。上海の偽り西洋の仮面を看破し、自身の志向を明らかにした」と指摘し、また失望によつて芥川はまたこの西洋たる上海を罵倒したという。施小煥氏は芥川が「二つの西洋——『本場の西洋』と『場違ひ』の西洋——」を意識していたとし、「しかしながらよかれあしかれ西洋を自分の目で見るのは面白い——より平明な表現で言い換えるとつまり西洋の俗悪で下品なる一面の存在を確認したことが有意義だ」と指摘するが、施小煥氏はまた俗悪で下品なる西洋を「場違ひ」だと見ることを納得せず、「これも考えれば本場の産には変わりがなく、いわゆる淮南の橘が淮北に移れば枳となる、というような生物学上に起ころる突然変異のごとく、中国に移れば、西洋そのもの自体が地理的要素でたちまち変質してしまう、というような解釈は、やはり受け入れ難いものである」と主張する。

また、日本に対する芥川の視線については宮崎由子（一一〇一一年）³・宋武全（一一〇一五年）⁴の論があげられる。宮崎由子氏は「上海游記」に言及された上海在住日本人を「会社派」と「土着派」に分け、「誰にでも祖国への強い愛着が生れる素地があるのだ」と芥川は指摘するのである」と述べる。宋武全氏も同じく「上海游記」に言及された上海在住日本人から読み取れる日本人としてのアイデンティティを指摘し、作中の「私」もそれに影響され、「日本人としてのアイデンティティが構築された」とによつて、「私」の、中国をママ進出した日本への求心力が働くことが確認できる」という。

そして、中国に対する視線では、紅野敏郎（一九七五年）⁵の、「動きつつある中國、苦惱する中國、つまり現実の中國への熱い関心、もしくは猛烈好奇心につき動かされての執筆というよりは、中國の風物、雰囲気、名所旧蹟への興味がより強く働いての執筆となつてゐる。この中國旅行がいわゆる大正八年の五・四運動のあとだつたにもかかわらず、である」というような否定的な指摘が存在している。一方で、周芷冰（一一〇一六年）⁶のように、「『私』は古典小説にあるような上海や『惡の都會』、『下

論文 一九九四年三月

² 施小煥「休言竟是人家国——芥川龍之介 上海に於ける西洋との邂逅」（『文芸と批評』第八卷第三号 一九九六年五月）

³ 宮崎由子「芥川龍之介『上海游記』『Xの矛盾』・上海在住の日本人」（『国文研究』第五十六号 二〇一一年六月）

⁴ 宋武全「在中日本人と芥川龍之介の上海訪問」（『岡山大学大学院文化科学研究所紀要』卷三九 二〇一五年三月）

⁵ 紅野敏郎「芥川龍之介『支那游記』と『湖南の扇』（村松定孝・紅野敏郎・吉田熙生編『近代日本文学における中國像』有斐閣 一九七五年十月）

⁶ 周芷冰「芥川龍之介『上海游記』論・『私』が見た『新しい』上海」（『人文論究』卷六十六第一号 二〇一六年五月）

品な西洋』としての上海のみではなく、革命の胎動をも強く感じられる、動きつつある上海をも発見できている。芥川が見出そうとする『新しい上海』がまさにここに顕在化している」と、芥川が中国を肯定する側にある指摘も存在している。

「場違ひ」の西洋

まず、芥川の異文化体験における西洋への視線について、論者は芥川の心情が「愉快」から「場違ひ」へと転換したと考える。二一〇四 第一巻 に散々出てくる「愉快」という言葉からわかるように、最初のころ租界で体験した西洋事情は芥川にとってよい体験だったと思われる。とはいっても、最終的に芥川は「十二 西洋」の章で「やはり場違ひのやうな気がするのだ」という評価を出している。この「場違ひ」の真意は「十二 西洋」での墓をめぐる問答を通じて示していると考える。「しかし僕はどちらかと云へば、大理石の十字架の下より、土饅頭の下に横になつてゐたい。」という記述がある。「大理石の十字架」「土饅頭」は言うまでもなく、前者は西洋、後者は支那を表している。また、上海旅について書いた書簡に「支那ノ風景ハ全然西洋輸入ノ文明ト調和シナイ」という言葉も残されている。よつて、論者は次のように主張したい。「場違ひ」とはある民族の住する場で他民族の文化や建物など文明を示すものを建てようとしていることにたいして芥川が覚えた違和感を示している。

「鯉幟」と日本

そして、日本への視線について、論者は芥川のまなざしには両面性があると考える。この上海において、日本は西洋と同じく外来者である。にもかかわらず、芥川が「上海游記」全篇で見物した日本事情に対しては「場違ひ」の評価、或いはその性質を批判する言葉がでてこなかつた。その理由はこの両面性によるものではないかと考える。「十九 日本人」の記述からわかるように、当時上海での日本人社会の中に芥川が接した人々は国家の動きと緊密な関係性を持つている方であつた。また、最後に想像した「X」の話では、「我我はかう云ふ点になると、大抵Xの仲間なのである」と芥川が述べる、つまり、上海の日本人社会と接する内に民族国家に対する意識が深められたと考える。また、西洋への認識と帰国後の作品「桃太郎」のきっかけとも言える章炳麟との桃太郎伝説をめぐる議論を合わせて見れば、芥川が当時上位国である西洋各国と日本が自らの文化をこの租界にもたらそうとしている欲望を意識はしているはずである。芥川の日本への視線には両面性があると考える。一方で、自身の日本人としての身分が在中日本人社会との接触によって実感され、もう一方で、先に挙げた「桃太郎」(『サンデー毎日』、一九一四年七月)の例からも分かる通り、芥川は日本による大陸進出の欲望も意識していると思われる。その二つの意識の間にあって、「上海游記」全篇の中で、最終的には見物した日本のことに「場違ひ」と言い出せなかつたものと考える。

「古き」支那と「新しき」支那

三つ目の支那への視線については、従来論において芥川が中国の未来を信じる立場

に立つとするものと、ただ上位国の国民として中国を見下しているとするもの、大きく二つに分けられるが、論者としては、芥川が当時の中国を傍観している姿勢を取っていると考える。三人の政治家の訪問記事において芥川は確かに当時の中国の政治状況をある程度紹介しているが、芥川自身は支那の政治にそこまで興味を示さなかつた。「十四 罪悪」においても同じく自身がいわゆる「Journalist 的才能」を發揮しようとし、支那（上海）の社会状況を記述するつもりであったのであろう。しかし、実際のところ芥川は、当時の上海における犯罪問題の裏までは把握することが出来なかつた。「二十 徐家滙」では、中国のキリスト教受容歴史を取り上げて新旧「支那」の変化を述べ、西洋・日本の提示もそこに含まれていると考える。以上三つの部分の論述からわかるように、芥川はただ当時の上海を傍観しているだけで、自身が体験した支那をそのまま記述している姿勢が見られる。先行論がいう支那の味方側に立つ、或いはただ支那を見下している、いずれもそこまで極端の態度を取つてはいないと考える。

終わりに

本論ではまず芥川が上海という国際都市における旅を通じて、その体験から得られた西洋、日本、支那への認識はどういうものなのかなを論じた。西洋に対しても「愉快」から「場違ひ」へ、そして日本人属性への目覚まし、最後は支那への冷静な傍観者姿勢を得たことが考えられる。この異文化体験に溢れた上海旅は芥川にとって、異なる文化・文明の間の境界線がより見えてくるという効果をもたらしたのではない。その影響はまた長く、上海旅を含む中国旅が終了した後、芥川は「支那旅行を境にして芥川の小説の作風（と題材）が変つた」と宇野浩二が指摘するように、「金将軍⁸」「桃太郎⁹」などのいくつかの反戦を題材にしたと言われる作品を出したわけである。この中国旅を通じて芥川の社会意識が深化したのは間違いないと言えるだろう。

⁷ 宇野浩二『芥川龍之介』普及版（文藝春秋新社 一九五三年十月）

⁸ 初出「新小説」春陽堂書店 一九二四年二月

⁹ 初出「サンデー毎日 夏期特別号」毎日新聞社

一九二四年七月一日